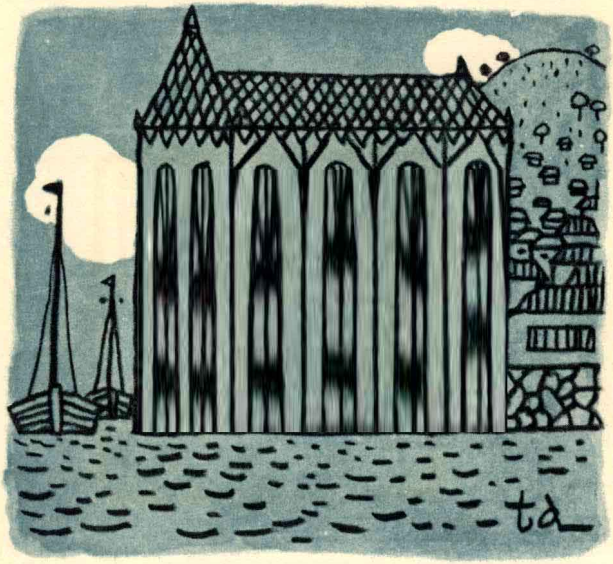
恋愛家族

恋愛家族

火野葦平



講談社版

恋愛家族

昭和35年4月30日　第1刷発行

著者　火野葦平（ひのあしへい）

¥ 270　発行者　野間省一

印刷所　豊国印刷株式会社

発行所　東京都文京区音羽町3—1　株式会社　講談社

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします。　（横田製本）

© Ashihei Hino 1960.　PRINTED IN JAPAN

目次

第一話　なぐりこみ……五
第二話　花嫁奪還……三
第三話　真の仲人……四一
第四話　恐妻一代男……六一
第五話　少年の恋……八一
第六話　陋巷の貴族……一〇一
第七話　豆腐と碁石……一三〇
第八話　密告英雄……一四〇
第九話　合同銀婚式……一六〇
第十話　嘘と女……一八〇
第十一話　コンマとピリオッド……一九九

装幀

宮田武彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

恋愛家族

第一話　なぐりこみ

一

「父ちゃん、前の女の方から、祝言の日に、なぐりこみをかけるとゆうとるそうよ」

女房が、そういう。

「誰から聞いたんだ？」

「もっぱら、それをいいふらしとるとかで、村尾さんが聞いて来て、坂本さんに話したのを、藤岡さんが聞いて、藤岡さんの奥さんがあたしに教えてくれたの」

「ややこしいな。デマじゃないか」

「デマじゃないらしいわ」

二月十八日、長男闘志と、川崎とし江との結納をとりかわした数日後のことである。結婚式は皇太子御成婚の五日前、四月五日と決めてあった。

闘志は、昭和五年九月二十四日生まれだから、もう、とっくに妻帯してよい年配なのだが、妹美絵子、弟英気の方が先に結婚していた。大阪の大宮信次（伊藤忠商店パルプ課勤務）に嫁いだ美絵子は、一昨年、女の子を生んだから、私は祖父である。英気と貴美子の夫婦も近く子供が出来る。孫が二人になるのである。しかし、これはまだ男か女かわからない。ところが、一番上の闘志は、どういうわけか、弟妹より後になっていた。どういうわけかといったが、それには無論いろいろなわけがあったためで、そのわけの一つに、私たち夫婦が、つまり闘志にとっては両親が、積極的に、嫁を探してやる気があまりなかったことが含まれている。

私は、いつも、子供たちにいっていた。

「親から、嫁や婿を探してもらおうとは考えるな。自分で見つけて来なさい。お前たちが単に一時的な気まぐれや浮気でなく、自分で責任をもって、これこそ一生を共

にするに足る異性だと信じる人間なら、お父さんもお母さんも文句はいわない」

私は、別に、恋愛至上主義者でもなければ、見合結婚否定論者でもない。それどころか、恋愛は美しいけれども危険でもあることを、よく承知している。どんなにはげしい恋愛をして夫婦になっても、すぐに別れてしまう例は世間に多いし、古風な習慣にしたがってやった見合結婚の方が成功している場合もある。しかし、私と女房良子とは、三十年ほど前、恋の果にかけ落ちして夫婦になったし、私の父玉井金五郎と母マンも惚れあっていっしょになった仲、私の大勢のきょうだいたちもほとんどが恋愛をして結婚したために、いつの間にか、恋愛結婚が玉井家のお家の芸みたいになってしまったのである。

といって、まったく放任していたわけではなく、適当と考える娘に出あったら、闘志の嫁にという気持はあった。しかし、そんな娘に出あわぬうちに、青年になった闘志が、どうやら恋愛をしている様子だったし、いつか恋人をつれて私たち夫婦の前にあらわれ、結婚の相談をするだろうと心待ちにしていたのである。ただ、

「仕事の関係で、飲みごとが多いらしいから、そんなところで、変な女にひっかからなければええがなあ」

というのが、私たち夫婦の共通した心配の種であった。

闘志は、早大の理工学部電気科を卒業し、日本電設の八幡支所に就職していた。日本電設の本社は東京にあり、関門国道トンネルの電気工事はみんな請負ったりしているから、かなり大きな会社である。八幡製鉄とも関係が深く、闘志は仕事のためによく出入りして、友人岩下俊作（「無法松の一生」を書いた作家で、八幡製鉄所安全課の係長）の世話にもなっているようだった。岩下は、私に会うたびに、

「あんたんとこの闘志君は、なかなか豪傑ばい」

と、いつもいっていた。

豪傑とは、どういう意味か。身体も大きく、元気で、日本電設八幡支所長が信頼して、自分の代理をさせるくらい、仕事も出来るらしいが、すこし酒を飲みすぎるの

が気がかりだった。酒を飲む方では人一倍の私が、息子に飲むなとはいえないけれども、問題は飲みっぷりなのである。飲むとすこしだらしがなくなるし、元来がお人よしだから、どんな女の手玉にとられないともかぎらない。といって、監督も行きとどかないので、心配だったわけだ。

その心配が的中した。昨年の夏、結婚したいと申し出て来た相手は、若松のバーで働いていた枝松鈴子という女性で、闘志がどんなに熱心に望んでも、私たちは賛成することが出来なかった。バーで働いている婦人だから忌諱したわけではない。その女性本人はともかく、彼女をとりまく人々に対して、いろいろな意味で、(このいろいろな意味は、あとで述べるつもりだが)どうしても許容することが出来にくかったので反対したのである。

私は、息子にいった。

「自分で見つけて来いといっておきながら、見つけて来た女性をいけないというのは矛盾しているようだが、お前が好きな女なら、どんな女でもかまわんというわけにはいかん。親子、きょうだい、親族、友人のつきあいがあるし、方々にミゾが出来、平和をみだす結果になっては面白くない。それは封建的な考えかたではなく、家族制度のせいでもない。大切な人間の心の問題だ。おれは自由が好きだし、世間の普通の親たちよりは、いくらか、ものわかりがよいつもりでいる。母ちゃんもそうだし、祖母ちゃんもそうだ。そのものわかりのよい、お前を心から愛している人たちが、みんな反対しているということを、お前はよく考えて欲しい。しかし、お前を束縛したり、おさえつけたりするわけではない。結婚を急ぐことはないから、あと半年、よくつきあって考えてみなさい。その半年の後に、お前がどうしても、その娘とでなければ絶対にいやだというなら、しかたがない」

そのころ、私はアメリカ国務省から招待されて、アメリカ旅行をする準備をしていた。そして、九月二十四日、パンアメリカン機で羽田を出発、約二ヵ月間、アメリカの旅を終えて、十一月十九日、日本に帰国した。旅行中、息子のことが気にかかっていたので、帰えるとす

ぐ、どうなったかと思って聞くと、形勢がまったく一変していた。

東京阿佐ケ谷の鈍魚庵に、社用を兼ねて上京して来た闘志は、新しい恋人川崎とし江を帯同していて、彼女との結婚の許しを私に乞うたのである。

「前の枝松の娘さんとの関係は大丈夫だろうな？」

「きれいに清算しました」

「後で、イザコザがおこるとうるさいからね」

「大丈夫です。鈴子さんをやめてから、とし江さんとのことがあんまり早いので、ちょっと気がさしますが、これには前々からいろいろなわけがありましたので……」

私は苦笑して、

「それはいろいろわけがあるだろう。問題は、前の女との関係だ」

「それは大丈夫です。とし江さんも、鈴子さんとのことはよく承知していますから……」

私は、川崎とし江とは初対面だったが、感じがよかったので、必要な事情をたしかめた上で、許可することにした。

そして、年が明けてから、正式に、闘志の上司である日本電設八幡支所長の前田氏を仲人に依頼して、結婚の準備をすすめたわけであった。女房良子も、老母マンも、今度はよろこんで、闘志の結婚を祝った。ところが、結納もすみ、結婚式の日取りもきまったのに、前の枝松の一族が怒って、祝言の式場になぐりこんで来るというウワサを聞かされたのである。

二

結婚してから、前に恋人があったことがわかる例は、世間にはザラにある。普通の人間なら、結婚前に、何回か恋愛の経験を持っているのが常識だから、それはかまわないけれども、困るのは結婚後もその関係が切れていないことだ。その厄介な問題が、はからずも、息子の結婚に際しておこって来たわけだが、前にも、数回、私は、同様の事件に、ぶっつかってへこたれた経験がある。

もう二十年以上も前、友人立花誠一郎の結婚に立ちあ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ったときの騒動は忘れられない。立花は私と同年で、父は船員、母は髪結いをしていた。

北九州は洞海湾を中心にして、八幡、戸畑、若松、小倉、門司、と五つの市が隣接している。昔は洞の海といわれ、千七百年ほど前、神功皇后が三韓征伐のとき、この海に入ってしばらく待機した。今は一万トン以上の汽船が悠々と入る洞海湾も、そのころは干潮時になると、昔の小さい軍船でも底がつかえるほど浅かった。遠征艦隊は洞の海に船をとどめ、古くなった帆柱の切りかえをした。八幡市の背後にそびえている帆柱山は、その伝説から生まれた名である。前はなんといったか知らないが、その山の木を切りだして帆柱にしたので、現在の名が生まれた。その他、神功皇后の遺蹟は洞海湾周辺にはたくさんある。私の郷里若松の名もそうだといわれている。

軍船の上から海岸を眺めると、白砂の渚近くに、若々しい松がならんでいる。そのころは寒漁村にすぎなかったから、そんな松林と、点々と漁師の家があるきりだった。

それを見て、神功皇后が、

「なかなかいい景色ではないか。宿禰、得意の歌はどうじゃ？」

と、いったかどうかわからないが、皇后の参謀であった武内宿禰は、一首の和歌を詠んだ。

「いかがでございます？」

と、いったかどうかわからないが、宿禰はその即興歌を皇后に示した。残念ながら、その歌がハッキリ伝わっていないが、なんでも、見はるかすと白砂の浜に若い松がならんでいるのが美しい、というような意味であったらしい。すると、それを見た皇后が、

「そんなら、あの土地を若松と命名するがよい」

と、いったかどうかわからないが、それ以後、若松という地名が生まれたことになっている。

そのころの蘆荻蕭条たるさびしい若松浦は、今は人口十万の若松市となった。そして、若松港は、背後に筑豊炭田をひかえて、日本一の石炭積出港である。帆柱山

のある八幡市には東洋一を誇る八幡製鉄所が出来、石炭と鉄とを中心にして、北九州は西日本重工業地帯の心臓部となった。現在は、洞海湾周辺の無数といってよい大小工場があらゆるものを生産し、林立した工場の煙突から吐きだされる煤煙が天を掩いつくして、晴れることがない。五市が合併したら百万に近い大都会になるのである。

この若松で、私の父の玉井金五郎は石炭荷役請負業「玉井組」を経営し、沖仲仕の親分になっているのである。父金五郎と母マンとが、一介の沖仲仕から「玉井組」を築くまでの苦闘史は、小説「花と竜」に詳述したので、ここでは省くが、若松港や、洞海湾をめぐる北九州の状況は、この「恋愛家族」の背景としても欠くことが出来ないので、すこしく筆を割いた次第であった。立花誠一郎の恋愛も、その騒動も、また、こうした環境の産物に他ならないのである。

石炭の港町として花やかに栄えた若松には、料亭が多く、三等料理屋や遊廓も繁昌した。正直にいって、あまり風紀の点では感心しなかったけれども、芸者や、オイランや、酌婦などがその妍を競い、脂粉の香は街を塗りつぶしていた観があった。こういう女たちを顧客にしている髪結商売が多く、また繁昌したことも自然であろう。立花誠一郎の母のいとなむ「白鳩美粧院」は、その中でも、特によい得意を持っていた。

或る日、立花がやって来て、結婚したいと思うので、仲人になって欲しいといった。

「相手は？」

と、私は訊いた。

「江上染子という女で、うちの店の髪結ッ子」

「おっ母さんの弟子なんだね」

「うん」

「恋愛？」

「うん、まア」

「僕はかまわんけど、君のお母さんや、その染子さんの両親の方は、もう承知しとるのかね？」

「うちのオフクロはええんじゃが、染子の親の方に、あ

んたに貰いに行ってもらえんじゃろうかと思うて……」
「本人同志が好きあっているのなら、それくらいの労はなんでもない」
「それは、もう……」
といって、立花はニヤニヤした。
浅黒い丸顔の中の眼が途方もなく大きく、ギョロギョロしていて、どうかすると顔中、眼のような印象を受ける。色男とはいえないが、男らしい顔立で、気質もサッパリしていた。気弱のお人よしだが、どこか頓狂なところがあり、これと定めたことはアッと思う間にやってのける決断力を持っていた。そのころ、若松の或る大きな鉄工所に勤めていた。
私は、彼の話を聞いた後、その江上染子の実家のある直方(うのがた)市まで、縁談の交渉に出かけた。直方は若松から、筑豊線に乗って一時間足らず、筑豊炭田の中心地で、私が後に小説「女侠一代」に書いたドテラ婆さんが、この鉄道建設の一役を買って活躍したのである。もっとも、私が作家として立ったのは、昭和十三年三月、「糞尿譚(ふんにょうたん)」で芥川賞をもらって以後のことだから、立花のために仲人役を引きうけたころは、「玉井組」の若親分という格であった。
江上家に行ってからの交渉は、合にやりやすかった。
「とにかく、本人同志が好きあっているのですから……」
それが強味になって、私の申し入れも自信に満ちていた。
染子さんの両親は、別に嫁入先を考えていた様子で、はじめは意外の面持だったが、最後には、私の意見と同様、
「本人同志が好きあっているのなら……」
ということになった。
そこで、私は安心し、結納や、結婚式の日取り、披露の方法など、祝言に必要な項目について打ちあわせをして、若松へ帰ったのであった。

三

立花に紹介されて、江上染子さんに会った。その第一

印象は、あんなに眼の大きな立花が、こんなに眼の大きな女と夫婦になったら、どんなに眼の大きな子供が生まれるだろうかということであった。同時に、染子さんがキリッとした顔立のシッカリ者で、立花よりも老けて見え、きっと、これは立花の方が尻の下に敷かれるにちがいないという直感がした。若いころは、同年配だと、女の方がたいてい長せているものだが、この二人の場合も、染子さんの方が姉さんのような気がしたのである。

しかし、染子さんは無口で、立花から紹介されると、ただ、

「お世話かけます」

と、ポツンといっただけであった。

立花の母安子さんの話によると、染子さんは十人近い弟子のうちでももっとも優秀で、将来はもちろん、自分で髪結処を経営して成功出来る才腕の持主とのことだった。昔から、下世話に、「髪結の女房に養われる亭主」という言葉があるが、いずれは立花もそうなる運命にあるわけである。しかし、彼は、

「いや、僕はそんなだらしない亭主にはならんよ。結婚したら、髪結をやめさせて家庭の主婦にする。そして、僕がなにかの仕事をはじめて、女房を養ってやる」

と、しきりに弁明していた。

これで、立花誠一郎と江上染子との結婚は、まず順調に運んだ形なので、ただ、祝言の日を目ざして、事務的な進行だけがあると思っていた。

ところが、式の五日ほど前のある日、「ちとせ」という大きな料亭の女将から、港岸にある玉井組詰所に、電話がかかって来た。玉井組事務所は、高塔山の麓近い正保寺町の自宅にあったが、荷役の便宜のため、伝馬船や道具類のある港岸に詰所があったのである。私は、毎日、玉井組の印半纏姿で、そこへ出勤し、汽船の荷役現場へ、石炭荷役の監督に通っていた。

「ちとせ」は、結婚式場に当てられていた。女将のお秀さんは、昔は名妓として鳴らした女で、芸者も五、六人抱えて居り、「白鳩美粧院」とは密接な関係があった。そこで、特に、「ちとせ」が式場として選ばれたわけであ

るが、私に電話をかけて来たお秀さんの声は、いつもの落ちつきはらった、剽軽な調子とまるでちがっていた。

私が受話器をとると、いきなり、上ずった声で、

「大きな大事が出来たですばい」

と、いう。

「誠ちゃんの祝言のことで？　……」

「そうですたい」

「どんなことです？」

「それが、あんた、『松葉髪結処』のお常さんが、祝言の日にあばれこんで来るといいだして……」

「なんで、また？」

「なんと、あきれるじゃなかですか。どうやら、お常さんと、誠ちゃんとは、タダの仲じゃなかごたる。お常さんはもう四十で、誠ちゃんよりも十以上も年上、それにあんな醜女で、わたしゃ、まさかと思うばってん、祝言の日になぐりこみをかけるというところをみると、どうもなア」

「それは、大変だ」

「それで、あんたも忙しかろうばってん、急いで、ちょっと、家まで来てつかアされんな？」

「すぐ行きます」

私は、自転車に飛び乗ると、大急ぎで、「ちとせ」に飛ばした。

お秀さんに会って聞いたところによると、こういうことらしかった――「白鳩美粧院」が繁昌して、店が狭くなったので改築した。その拡張工事の間、立花誠一郎は自分の部屋がなくなったので、母親の安子さんが、同業者のお常さんに頼んで、店が出来あがるまで、「松葉髪結処」に下宿させてもらうことにした。ちょうど、二階の六畳が空いていたので、立花はそこへ移った。

「御迷惑でしょうが……」

と、母親は恐縮して依頼したのだが、それがまちがいのもとだったのである。

お常さんは髪結としては評判で、組合の顔役だったが、醜女（ぶおんな）としても評判だった。背が低く、顔は「チン」という綽名のとおり、ただ、色の白いのが取柄だった。

それでも長年、いわゆる「髪結の女房に養われる亭主」がいた。彼はなにも仕事をせず、酒やバクチに明け暮れしながら、夫の役目は果していた。その亭主が二、三年前、急性肺炎で死んでからは、お常さんはずっと後家暮らしだった。女盛りの肉体を持てあましてはいたのだが、不器量なので、男が相手にしなかった。そこへ、若い立花誠一郎が下宿したのだから、お常さんにとっては、カモがネギを背負ってころがりこんで来た気がしたのかも知れない。立花が下宿した部屋は、死んだ亭主の居間であった。

しかし、お常さんと立花と関係が出来ていたことは、江上染子さんとの祝言が近づくまで誰も知らなかったのである。お常さんが、結婚式場へなぐりこみをかけるといいだしてから、急に、関係者があわてだしたのであった。

「ちとせ」のお秀さんは、困ったような、おかしいような顔つきで、

「ばってん、誠ちゃんに、なんぼ、お常さんとのことを白状しなさいとゆうても——絶対に、肉体関係はなか、とゆうて、ほんとうば、いわんけん、あなたがひとつ、問いただしてみてつかアさい」

と、いう。

そこで、私は、行きつけのおでん屋「一平」の二階の一室に、立花誠一郎を呼びだし、二人きりで対決した。

「お常さんが、祝言の席になぐりこんで来るという以上は、君と無関係であるはずはないよ。あったってええんだ。そんなまちがいはありがちなことだし、あったらあったとして解決した方がええ」

「そんな変な関係はないよ」

「ないものが、どうしてあばれこんで来るんだ？」

「僕が厄介になったのに、お常さんに挨拶をしなかったもんで、怒っとるんだろう」

「誠ちゃん、そんな子供だましはいわんでくれよ。今さら、あったことを責めとるんじゃないんだ。下宿で厄介になったくらいで、女が祝言の場になぐりこみをかけたりするもんか。ヤキモチにきまっとるよ。あったとして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.